

### <研究ノート>事例的方法に関する若干の問題

ISHIKAWA, Kiyoshi / イシカワ, キヨシ / 石川, 淳志

---

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会労働研究 / Society and Labour

(巻 / Volume)

15

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

73

(終了ページ / End Page)

98

(発行年 / Year)

1969-01-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00017836>

## 事例的方法に関する若干の問題

石川 淳 志

社会調査の領域における「統計的方法」と「事例的方法」の関係については、まだまだ検討されなければならない問題が数多く存在するように思われる。たしかに一般的な結論としては両者はけっして互に排斥しあうものではなく、相互補完的な関係にたつと<sup>(注1)</sup>いうるであろう。しかし、こうした結論を導き出す過程で、なお慎重に検討されなければならぬ問題がいくつか存在している。二つの方法が接点を見出す努力を放棄したままそれぞれ別個の立場から因果関係や法則を追求し、相互に他の方法に対して批判を加え合うようないわゆる「社会調査論争」は当然措くべきであろう。要は、解明されなければならない社会事象の核心にどれだけ迫りうるかという点に問題があるのであるから。だが安易な折衷論に傾むくことは十分注意しなければならぬとしても、たとえば客観性に関する一面的な理解から一方に軍配をあげ、「事例的方法が社会調査の研究方法に占める位置を、統計的調査とくらべてみたばあい、どちらかといえば後退的である」というような批判は、「後退的」ということの意味をもう一度問い質すべきだとは

思うが、やはり問題とされなければならないのではなからうか。この点に関しては、統計的方法の活動領域を確定しながらさらに拡大することを志向すると同時に、事例的方法のもつ意義をさらに掘り下げ、あらためて両者の関係を再考し直すことが望まれよう。

この小論は、そうした意図からする調査論の準備的考察のためのノートであるが、さしあたって事例的方法に対する二、三の批判を再検討することからはじめ、ついで事例的方法による具体的調査例としてリンド夫妻の「ミドルタウン研究」およびランツの「炭坑町調査」をとりあげ、特に参与観察を中心としたその方法論を私なりにもう一度ふり返って考えてみたい。

全体としての行論は、当初の意図よりも多少事例的方法の側に寄り過ぎたきらいがなくもない。しかしそれはまた、常日頃職場や地域における生活に実際に「参与」し、またその中で調査し分析しなければならぬ社会的現実<sup>1</sup>に常に鋭く直面しているわれわれ一人一人にとって、やはり事例的方法や参与観察はきわめて重要な調査手段とならなければならぬと考えたからにはかならない。

一

事例的方法は、質的データを扱う「質的研究」とも称されるが、この質的研究に対して与えられる批判の一つは、データの代表性に関するものである。たとえば「質的データは、事例そのものが研究の終極的な課題であるばあいを除けば、包括性を欠き代表性の保証もないので、普遍的法則を導き出すことができないと考えられている」というたぐいの批判である。たしかに質的データを扱う事例的方法は、その名称の通り対象としての個別事例を扱うものであ

(注2)

り、その限りでは「特殊」から「普遍」への帰納に何らかの不安を抱かせるむきがないとはいえない。だがしかし、こうした批判の背後には、数量化主義の立場からする「普遍性」即ち「統計的普遍性」という前提的理解が存在しているように思われる。各々の社会事象から導き出される法則の定立は、はたして「統計的普遍化」のみによってもたらされるものであろうか。各個別事例に内在する普遍的事実を法則として認識するばあい、手続きとして、共通事項の一般性・普遍性を「算えあげる」ことは一つの有力な手段ではあるが、これこそが科学の方法論であるべきだという考え方には若干行き過ぎがあるのではなからうか。今ここであらためて統計的法則自体を論じたり、「普遍性」とか社会事象に関する「必然的因果関係」とかについて考察を加えたりする余裕はない。しかし質的データからは普遍的法則を導き出すことができないとする考え方の底には、法則定立的方法 (idiographische Weise) と個性記述的方法 (nomothetische Weise) とを対置した上で、個性記述的方法の側に事例的方法を無媒介的に結びつける強引さがあるように思われる。たとえば非行少年の調査などのごとく、個別事例の解明それ自体が目的であるようなばあいはそれに当るだろう。しかし一般に社会調査における事例的方法ないし質的研究にあっては、個別事例の特殊性のみが問題とされているのではない。もしかりに特殊性が問題にされるとしても、その特殊性が全体社会の中でいかなる位置を占めているか、そしてそれは社会科学の理論の中でいかなる意味をもつか等々を明らかにするために問題にしているのである。個別事例の究明を通じて社会科学の法則性を明らかにしようとする点では、質的研究ないし事例的方法も「法則」の定立を願うものであり、けっしてヴァインデルバント流の一回起的個性のみを扱う個性記述学と同類ではない。こうした問題に関してはすでにウェーバーによって批判的に理解が深められているはずである。よく耳にする「個性記述的な事例的方法」といういい方の中に、意識的にか無意識的にかドグマティックな理解が潜められ

ていることをわれわれは注意したい。

また事例的方法は、「母集団の代表的標本を、しかも多量に、手に入れることがむつかしい点」<sup>(注3)</sup>、さらに「質的データには代表性の保証がない」点で科学的調査法として欠けるものであるといわれている。しかしその「代表性」とはいかなる意味のものと考えられているのであろうか。先の批判的見解によれば、それはまず「包括性」の欠如のゆえに「代表性」をもちえないとされている。この「包括性」はインケルスとレヴィンソンに従って質的データの「集中性」と対置され、さらに「広さ対深さ」の問題としても表現できるものとされている。<sup>(注4)</sup> だが社会調査におけるデータの代表性とは、対象範囲の広狭を基準とした代表性、あるいは「母集団を代表する標本」というような意味での代表性だけにとどまるであろうか。すでにここには「代表性」という概念をめぐって、「質的研究法」と「量的研究法」との対立があらわれている。事例的方法ないし質的研究法において取扱うデータは、必ずしも「多数」をよくあらわす「代表」だけではない。たとえばこの問題がもっとも端的にあらわれる調査対象選択のばあいを考えても明らかである。一定の理論的座標軸に従って地域社会なり集団なりの発展とか進化とかを考えると、もっとも先行的・先進的あるいは原型的・後退的な地域社会や集団を意図的に対象として選択しても、それはやはり「代表」でありうる。この際に問題となるのは、対象を選択せしめた理論的座標軸の当否であり、またそれを導くにいたった背後の「社会科学の理論」そのものであって、けっして「母集団」からの確率的代表性のみに存否をかける「標本」の妥当性ではない。つまり「全体」と「部分」の総合的位置づけが問題なのであって、この両者の科学的関連性を確率論だけに求めるのは操作主義にほかならない。もちろん母集団からのサンプリングによる対象選択を一概に否定することは、これもまた行き過ぎであろう。調査内容によって、対象範囲の大きさによって、何らかの「標本抽出」

をおこなわなければならないことはいくらでもありうる。しかし、いわゆるサンプリングによる「代表」抽出こそが、したがってまたその理論的基礎としての確率論こそが「科学的」であり、「個別事例の典型性・代表性の保証がないので、普遍的な法則をみちびきだすことが困難」<sup>(注5)</sup>な事例的方法是、「科学的調査」として欠けるものであるという批判は認め難い。その意味で、従来とかく「非科学的」と非難されてきた有意選択法や典型法の意義も、もう一度考えられてよいと思う。そこでは「有意」というばあいの意味や意義こそが問題とされるべきであり、また「典型」を設定するばあいの調査の背後に存在する「理論」自体が検討の対象になるのであって、これらを切り離した次元で「手続き」的に非科学的ときめつけるのは当をえないものといわざるをえないであろう。こうした批判については、調査対象決定の際の理論的基礎を確率論のみに求める認識論的立場こそが問われなければならない<sup>(注6)</sup>。

注1 福武直・松原治郎、社会調査法（一九六七）、七八頁。

注2 見田宗介、価値意識の理論（一九六六）、三六四頁。

この書の第六章「価値意識研究の方法」は、私としては賛成し難いところも少なくないが、ユニークな問題整理がおこなわれており、大へん参考になった。なお価値意識の数量化を志向する著者が、態度などにあらわれた行動的価値に関しては種々の困難があるとはいうものの何となく「検証」可能であるとしているのに対し、「観念的価値に関しては究極的には操作的定義という考え方の助けを借りて逃げを打つより仕方ないのではなからうか。」（三五二頁）と述べていることは、目下のところこの種の意識調査のすべてを語っているといえよう。

注3 ランドバーク（福武・安田訳）、社会調査（一九五二）、四三六頁。

注4 見田、前掲書、三六三頁。

注5 福武・松原、前掲書、七八頁。

注6 この点に関して、「お互いに自己の哲学的基礎を明確にしつつ、共通の技術過程が認識主体の差によって、認識結果としての理論にいかなる差異をうみだすかを明確にしてゆく必要がある」（福武・松原・前掲書、一一頁）という主張に賛成である。

二

以上のように考えてくるとき、リンド夫妻のミドルタウン研究は、事例的方法によるきわめて優れた業績として、われわれに多くの示唆を与えてくれる。<sup>(注1)</sup>周知のようにこの研究は、アメリカの一地方小都市における人びとの生活活動の分析を通じて現代文化自体の究明を志したものであり、前後二回にわたる調査とその報告は、アメリカ社会の現実を鋭く描き出し、社会学におけるコミュニティ研究の先駆的業績として高く評価されている。この小論で調査結果の詳細を述べる余裕はないが、さし当って最初に調査対象とされたミドルタウン（インディアナ州マンシー市）選択の理由を考えてみよう。それは、ミドルタウンという地域社会を一つの「典型的」な事例として選択する調査対象決定の問題をめぐっても、優れた「事例」となっているからである。

対象選択の条件としては、まず現代アメリカ文化の究明という研究目的に沿って、①できるだけ現代アメリカの生活を代表する都市であること、②全体関連的研究を十分におこなうことができるようにコンパクトで同質的な都市であること、の二点が考えられる。そしてさらに具体的に対象を絞る過程で、望ましい条件としてつぎの七点があげられる。①温和な気候（生活における諸活動の均衡性からも気候が問題になりうる。リンドは具体的には、冬になれば雪が降るような地方を考えている）。②現代の社会変動にもなつて生ずる諸苦悩が種々の側面にあらわれているような、かなり速い社会的成長度を示していること。③現代の機械制生産にもなう産業文化をもっていること。④単一企業が支配的でないこと。⑤産業活動と均衡を保つて地方的な芸術生活が現実に存在していること（ただしそれは自律的な地方芸術で、たとえば大学都市における芸術活動のごとく、大学が地域の音楽や講演に介入するというよう

なことがないこと)。⑥中庸的なアメリカの地域社会と異なるような特殊なさし迫った地域的問題のないこと。⑦で  
きるならアメリカ中西部の公分母的な都市であること（中西部は、北部と南部からの開拓者が合流した地点であり、  
また社会事業活動と政治的進歩主義の中心であって、あらゆる意味で中間的性格を示しながら、一定の統一性と安定  
性を保っている地域である）。そしてさらに限定するために三つの条件がつけ加えられる。①対象の把握に際してコ  
ンパクトであり同質的であることを考えて、人口二万五千人から五万人までの都市であること（一九二〇年のセンサ  
スによれば一四三の都市がこれに該当する）。②衛星都市などでなく、自律的な都市であること。③同質性を知り、  
また文化変動の究明を容易にするため、対比的な意味で少数の異質な黒人と外国生れの移民を含んでいる都市で  
あること。こうした諸条件を考慮した結果、最終的にミドルタウンが調査地に決定されたのであった。<sup>(注2)</sup>

ここで、選択されたミドルタウンは、現代アメリカの社会生活を全体関連的に究明するために選択された「典型」  
としての都市であり、けっしてそれ自体が研究目標となっているわけではない。典型設定の諸条件は、社会生活をよ  
りよく解明し、現代社会そのものの核心により接近しようとする見地から理論的に導き出された限定条件である。対  
象決定の最終段階において、一九二〇年センサス中一四三の該当都市から特にミドルタウンが選定されたことについ  
てとやかくいう必要はなからう。おそらくこの段階においては、ミドルタウンでも、その他のA市、B市、C市等々  
でも、決定的差異はなかったであろう。たとえ多少の差異が認められたにしても、要するに現代アメリカの社会生活  
を全体関連的に把握しようとするばあい、研究の円滑な遂行にとってどちらの都市がより適当であるかという、程度  
の差であったと考えられる。むしろこの研究目的のばあい、アメリカの全都市の中からサンプリングによって「無作  
為」に対象を抽出したならば、はたしてどれだけ適切に現代アメリカの社会生活を描くことができたか疑問である。

しかしなおここで執拗に、はたしてこの「事例」が現代アメリカの社会生活をよく代表する事例たりうるかという問が発せられるかもしれない。だがそうした問に対しては、調査報告書全体がその回答に当てられるであろう。いずれにしても単に有意的な選択過程にもとづく「事例」だからといって直ちに普遍性に欠けると考へるのは早計である。ここに示された事例は、それ自体解明の対象とされる特殊個別的な事例というよりは、一般的普遍性を抽出するための具体的素材としての事例であったのである。

調査対象としてのミドルタウンは、一八二〇年頃最初の永住者がここに住み着いて以来急速に発達してきた都市であるが、しかし一八八五年までは人口わずか六千人ほどの、穏やかな、開拓者時代の慣習も多く残存せしめている田舎町であった。だが一八八六年末、この地に天然ガスが噴出するようになって以来急速な社会変動が始まり、一九二〇年現在には人口三万五千人を算えるまでにいたり、ガラス・金属・自動車部品製造の三大工業を抱える近代的な地方都市に発展したのである。この間にあって、地域発展の直接的契機をなした天然ガスは、噴出後わずか数年で再び途絶えてしまったが、すでにいくつかの工場は稼働を始めており、一八九〇年には人口も二万人を超えるまでになっていた。結局工業化された近代的なミドルタウンの基本的構造は、すでに一八九〇年当時にはほぼ確立されていたとみることができると。この一八九〇年という年次は、後でまた問題となる。もちろんこの町の工業化の基礎には単なるガス・ブームだけではなく、一八八〇年から一八九〇年代にかけてのアメリカ資本主義の飛躍的發展があったのである。ミドルタウンの存在するインディアナ州においても賃金労働者数は一八八〇年に六九五〇八人であったのが一八九〇年には一一〇五九〇人となり、さらに一九〇〇年には一五五九五六人に増加している。また資本投資額も各一〇年前の二倍ずつという増加ぶりを示している。こうした全体社会の動向を背景としてミドルタウンにおける社会的変

動は、天然ガス噴出という特殊条件に触発されて、特にドラスティックに展開されたのである。いずれにしてもミドルタウンは、短期間にきわめて激しい社会的文化的変動を経験しており、この地に開業している一医師の体験談にまつまでもなく、「一人の人間の生涯の間に、驚くほど多くの技術的・文化的変動が生じている」都市であった。しかもまたそれと同時に、変動が急激であっただけに旧態的な生活慣習も依然として残存し、いわゆる迷信やまじないのたぐいも見うけられ、その意味では一面におけるいわゆる地方的伝統性を内包する地方都市でもあった。そしてこうした状況下に居住する住民の構成は、地元民九二%、黒人六%、外国生れの白人二%という、当初の意図通りきわめて現代アメリカの社会生活を把握し易い、同質性を保つコミュニティなのであった。<sup>(注3)</sup>

なおここで調査対象決定における典型地域選択の例として、ランツの「炭坑町」調査をとりあげてみたい。<sup>(注4)</sup> かれは一つの小炭坑町を調査対象に選び、①経済・法律・行政・宗教・教育・リクリエーションのパターンを捉え、②そこから生み出される「価値」を考察し、③経済的好・不況期を通して見られた地域社会自体の特徴と地域居住者のパーソナリティ分析にもとづいて、人びとの間における日常生活のエトスを究明しようと試みたのであるが、その素材としての炭坑町は、つぎのような要請によって具体的に選択された。

①急速な膨脹と繁栄・衰退の時期を経過した地域社会であって、その歴史上、この地方の炭坑町に生じた典型的な社会的・経済的変動を経験していること。②その社会的発展過程を正確に把握するために、比較的最近成立したコミュニティであること（当該炭坑町は一九一四年に設立され、その歴史を正確に把握することは比較的容易であり、種々の記録・統計なども整備されていた）。③地域社会をインテンシヴに研究しうる程度に人口規模が小であること（この町の全人口は二三〇〇人）。また居住歴の長い人びとが相当程度存在し、地域社会の発展と衰退の過程を正し

く知ることが可能であること。④地域社会を構成している人種の中には、この地方における炭坑町の典型的な諸グループが包含されていること。

この調査においてなぜ炭坑町が素材として選択されたのかは必ずしも明らかではないが、ランツも述べているように、分析を通じて①単なる一小炭坑町の記述のみに終ることなく、この町で見られる人びとの社会生活を、より大きな社会の生活に結びつけて考察すること、②またそこにあらわれた日常的エトスを記録し、観察すること、という試みは確かにこの素材において成功している。それは、二年間にわたる激しいストライキの経験を含めて、繁栄と衰退とのドラスティックな変遷過程を歩んできたこの炭坑町において、前記の目的に沿う問題点がより明確に、またよりヴィヴィッドにあらわれているからであり、その意味で調査者の意図に合致した「典型」が正しく選択されているからであろう。したがってまたランツ自身も、「炭坑町は、その発展に関してある独特の様相を示しているが、しかしより基本的な社会過程とその展開の大部分は、かつて今もアメリカ社会の特徴をよく示している」と自信をもって述べているのである。<sup>(注5)</sup>

注1 R. S. Lynd and H. M. Lynd; *Middletown — A Study in Modern American Culture*, 1929. (以下Aと略称) .  
R. S. Lynd and H. M. Lynd ; *Middletown in Transition—A Study in Cultural Conflicts*, 1937.(以下Bと略称).

なおミッドルタウン研究におけるリンドの方法を紹介したものとしては、鷹取昭「リンドにおける方法論」(社会学論叢・第一六号、一九五九)がある。

注2 (A) pp. 7~9.

注3 (B) pp. 10~17.

注4 Herman R. Lantz; *People of Coal Town*, 1958. (以下Cと略称). なおランツについてわれわれは余り多くのことを知らないが、アプセーカーは、「膝を屈するのを拒否して、社会科学のあらゆる分野できわめて重要な業績の生産をつづけて

きた例外的な人びと」として、社会学のルイス・マンフォードとリンド夫妻の名をあげ、それにつづけて「抽象的经验論者」の手法を用いる人びとのあいだでも、いくつもの突っこんだ研究が出ており、たとえばハーマン・ランツの『炭坑町の人びと』のように、きわめて鋭い価値判断と主張、構造的原因の透徹した探求が出ている」と述べている(H・アプセーカー「ライト・ミルズの世界」陸井訳、一六〇頁)。

注5 (C) p. 3

### 三

われわれが「ミドルタウン」や「炭坑町」から学ぶばあい、その内容に関してはいうまでもないことであるが、さらに調査方法上の問題として看過することができないのは、これらの事例的方法を支えているところの調査スタッフによる参与観察である。

ミドルタウン研究の調査スタッフは、一九二四年一月から約一年半の間ミドルタウンに居住して市民と生活を共にしながら、ひだ細かく、全体関連的に対象を把握することを目指した。もちろんこの間にあって、統計・記録・文書をはじめ地方新聞や個人の日記・手紙、さらにフォーマル・インフォーマルなインタビューや質問紙調査など、さまざまな調査技術を用いて資料集収がおこなわれたことはいうまでもないが、何といてもミドルタウン研究をもっとも特徴づけている方法上の問題は、調査スタッフ自身の地域生活への参与である。「かれらはあらゆる可能な方法で市民生活に仲間入りし、友人を作り、ミドルタウンの住人と同じような地縁的結合様式をとり、またその義務を果した。こうしたやり方で、人びとの自発的協力が獲得され、スタッフに対する『えらぶた』というような見方も少なくなつた。」またかれらは、さまざまな種類の会合に出かけ、あらゆる機会にあらゆる階層の人びとと接触すること

を心がけ、こうして「調査の終り頃には、よそ者には全く入手不可能であるような情報さえも手に入れることができた」のであった。<sup>(注1)</sup>

またランツ達の炭坑町調査スタッフ（社会科学者2、新聞記者1、助手4）は、現地調査の二年間を中には喜んで準備から報告書作成まで約四年間炭坑町の調査研究に従事したのであるが、その間の調査方法は、膨大な量におよぶ地方新聞（一九一九年より一九五三年まで）の分析をはじめ、既存統計・記録・文書の集収・分析、さらにきわめて広範囲におよぶインタビューの実施などである。このインタビューは「この研究におけるもっとも重要な資料源」とされるもので、厳しく訓練された面接者三名が、二年間、約二五〇人の被面接者に対して、総計およそ二千時間にもおよぶ面接をおこなっている。インタビューの形式は、あらかじめ質問事項を定めて一人が話し一人が記録するフォーマルな形もあれば、日常的会話を通じておこなうインフォーマルな形もあり、また面接時間も被調査者によって二時間程度ですむものもあれば、総計二〇時間を超えるようなものもあり、さまざまであったが、いずれにしてもスタッフは、地域における社会生活の中に入り込み、またその日常生活過程における諸相互作用のパターンの中に自からを投入しながら面接調査をくり返したのであった。<sup>(注2)</sup>

ところでミドルタウン研究における事例的方法およびその中核をなす参与観察は、周知のように文化人類学者として出発したリンドにとって、ある意味で当然採用されるべきアプローチであったといえる。しかしリンドのばあい、単にかれが従来育ってきた土壌における主要な研究方法、つまりかれがもっとも馴れ親んだ研究方法というだけで文化人類学的事例的方法・参与観察法が採られたのであろうか。

人びとの生活活動の中に見られる錯綜した諸傾向を、同時に、全体関連的に研究することを通じて、現代社会・

現代文化自体に迫ろうとしたミドルタウン研究は、リンド自身がいつているように、たしかに広く網を張り、時には無駄と思われるような努力をくり返さなければならぬ general survey であった。後にかれば、「骨の折れる道を、仕事の虫として、熱情と疲弊の間をいったりきたりしながら」、どちらかといえばあまりに広く網を張る general survey のような調査のタイプに時には批判的な考えを抱くことさえあり、「一般に社会調査は、水平的に表土をかき集めるよりは、垂直的に掘り下げることによって、より多くの収獲をうるように思われる」とまで述懐している。しかしすぐそれにつづけて、広範囲に手を拡げる調査が必要とされるつぎのような三つのばあいをあげている。

①未開社会の研究のごとく、調査研究の対象が先進文化との接触できわめて急速に変化しているとき、これらの未開文化をより広い視角から、それが失われる以前にスケッチすることが望まれるようなばあい。②子供の発育に関する研究のごとく、新しい研究領域が生じたため、ある程度包括的総合的な研究が問題を確認するために必要だとされるようなばあい。③すでにこれまで数多くの個別的な垂直的研究がおこなわれていたとき、それらの諸発見的事実を同一のパターンとして再考察するために水平的研究を定期的におこなうようなばあい。そしてさらに第二、第三のばあいの調査は、データをただ部厚く積重ねるだけでなく、新しい問題を発見し、それに注意を喚起するときのみ正当化されるとし、一九二四年における最初のミドルタウン研究は、いくつかの分散した垂直的研究を統合するものとして上述の第三のばあいと考えてよいだろうと述べている。<sup>(注3)</sup>

だが従来の個別的垂直的研究を統合する意味からだけ包括的全体関連的な事例的方法が採られたのではない。最初の著書の冒頭にかれが述べているように、調査が、人びとの現代生活の中に見られる錯綜した諸傾向を、同時に、全体関連的に研究しようとする目的をもつものであるとき、それはつぎのような避け難い困難な条件に直面する。①

自分自身がその内部に生活している文化を究明するばあい、完全に客観的になることはむつかしく、無意識のうちに感情的ウェイトをかけた前提から出発するというよくある誤りに陥り、その結果はじめに客観化し究明しようとして設定した問題領域から外れてしまう。②たといかなる生活の断片であろうとも、それ以外の諸生活のすべてを研究しなければ適切な理解には達しないとされるが、一体われわれは総体としてさまざまな様相を示す諸々の生活事項の調査をどのように設計すべきなのか。<sup>(注4)</sup> こうした問題に直面してリンドは、細目については不確定的だが、人びとの行動（生活活動）の主要項目については比較的明確である文化人類学の研究法に「迷路脱出の導き糸」を求めたのである。それはまたかれの言によれば、「すべて制度からなりたつ世界における広汎な問題設定の可能性に対して、鋭く限定された問題を考察する」ところの「社会科学における調査でもっとも望ましい傾向」であり、また限定された問題を焦点として広大な研究領域に切り込むタイプの調査であって、一般的な仮説によって「一般的な見取図」をえようとする行き方とは全く違った研究法なのであった。<sup>(注5)</sup> リンドの論調には、自己の研究法に対して加えられた批判や、時には自分自身でも陥りがちになる“general”という問題に対する批判的反省を意識した防衛的ニュアンスが感じられないでもないが、とにかく以上のような意味から、人びとがおこなう社会的行動のすべてはつぎの六つの主要な行為系列のどれか一つあるいは二つ以上に入るとして、①生活の資をうること、②家庭を営むこと、③子供の教育、④余暇の利用、⑤宗教活動、⑥コミュニティ活動、の六項目が設定されたのである。<sup>(注6)</sup>

このばあい調査対象としての地方都市ミドルタウンは、こうした諸人間行動の錯綜した複合体として捉えられている。したがってまた、こうした意味における対象を素材として、前記の限定的視点を中心とした生活活動の同時的全体関連的把握を通じて、初期の研究目的が追求されることになったのである。このような論理設定を辿るとき、具体的な

調査技術としては参与観察がもっとも有効適切な手段であることはいうまでもなからう。研究目的および研究対象に規制されて当初の理論的枠組をルーズなものにとどめざるをえないばあい、それだけ現地における調査の進め方は、柔軟できめ細かいものであることが要求される。そしてそれがもっとも有効に発揮されるのは参与観察なのである。

ミドルタウン研究において参与観察によるきめ細かな、そして柔軟な調査の進め方を採用した成果は、たとえば現在の行動を比較する時点としての一八九〇年の設定、さらに「階級」的視座の設定などに端的にあらわれている。これらはいずれも最初から一定の理論的枠組をもってはじめられたのではなかったが、観察を続け、調査を進めていく間にしだいに明らかにされていった問題点であった。

なかでも「階級」の問題は、社会学におけるその後の階級階層研究にきわめて大きな影響を与えただけでなく、前後二つの著書を通じてミドルタウン研究の内容を質的に高めている重要なポイントである。かれらは調査を進めていくうちに市民の生活活動がけっして一様ではなく、明らかに異ったタイプのものとして類型化される必要があることに気づくにいたった。リンドはつぎのように述べている。「ミドルタウンは、人種的にもその他の諸点においても同質的であるが、単一の都市として主要な生活活動を一律に記述することは不可能であるということが明らかにになった。市内部の諸集団を規定するいくつかの試みがなされた。そして遂に、もっとも適切に現実を示している相違は、<sup>(注7)</sup> business class と working class の相違であるということが決定された。」ただしこの「階級」は「生活の資をうる方法」にもとづく分類で、むしろ職業階層と呼ぶべきであろうが、しかしこの研究において、現実の社会生活はきわめて鋭い階級階層分化の中に営まれており、同一地域内部にあってもけっして同一の文化的社会的な生活活動がみられることはない、とした先駆的業績は高く評価されなければならないだろう。

また一八九〇年という年は、一九二四年現在の生活活動を理解するために、対比的に設定された年次である。かれらは、この三五年間に示された行動傾向の変化を観察することによって、現代における社会生活機能のダイナミックな把握を果そうとし、現時点で見られる諸行動を条件づけているものを、できる限り客観的に一八九〇年の時点においても見出そうとした。<sup>(注8)</sup>なぜ一八九〇年という時点が選定されたかについては先にも触れた通り、ガス・ブーム以降この時期までに今日のミドルタウンの基本的な姿がほぼ完成されていたという歴史的理由による。しかしこの二時点の対比によってどこまで現在の生活活動の「理解」が果されたかは必ずしも明らかではないように思われる。この点については、もちろんきわめて困難なことではあるが、むしろこの間における行動傾向の変化の過程をできる限り克明に辿った方がよかったのではないだろうか。しかし一面において実に見事に二時点間の対比が示されており、その意味で行動傾向の変化そのものを浮き彫りにする意図は確かに成功している。たとえばミドルタウンは天然ガス噴出以後急速に近代的工業化の一途を辿ったため、徒弟制度の急激な崩壊をはじめ、労働問題の急速な激化が生じ、一八九〇年当時においてはデトロイトと並び称されるほどの労働運動の街であり、労働者の組織率もきわめて高かった。しかしその後工業化の発展が頭打ちとなり、一八九〇年当時の産業状態が固定化してほぼそのまま現在まで持続される過程で、労働運動はしだいに衰退し、労働者の「集团的連帯」も失われていった。今日、老人たちの中には労働騎士団に入会する際の「儀式」について語り、その意義を説く者もいないではないが、一八九〇年に偉大な日と仰がれていた Labor Day (労働者休日、九月第一月曜) は現在ほとんど顧みられておらず、かつての強力な労働組合もほとんど消失するか細々としたものになってしまっている。そして労働者の心理においても労働に対する誇りは喪失し、子供にはもっと良い教育をとという労働者家族の言葉は、現在の壁を打ち破る道のないかれらの立場をよくあら

わしている、等々。<sup>(注9)</sup>

だがこうした「対比法」がもっとも素晴らしい成果を示しているのは、いうまでもなく第一の著書と第二の著書自体の対比である。最初の調査以後約五年を経て大恐慌を経験したミドルタウンが、その後どのような姿を示すにいたり、人びとの行動・思考様式がどのように変化したかを追求している *Middletown in Transition* は、もちろん研究者としてのリンドの問題意識から生み出された新しい業績ではあるが、それを可能にした基礎はすでに第一作において方法的に確立されていたわけであり、いわば第二作の現実化はかれの方法論からする必然的帰結であったといえよう。各々の報告書の内容もさることながら、ミドルタウン研究全体の評価をより決定的にしている要素の一半が、十年の間隔を置いた前後二回にわたる調査の実施それ自体の中に存在していることを考えれば、いかにこの対比年次設定が重要な意味をもってくるかが理解されるであろう。

注1 (A) p. 506. なおリンド夫妻は二度目の調査(一九三五年)においても五人の助手と共にミドルタウンのあちこちに住み込み、地域生活への参加をおこなっているが(B. p. 5)、この時の研究には前回よりも一層多くのインフォーマルな会話がデータとして用いられた(B. XVIII)。

注2 (C) pp. 2~7. なおランツは、「面接者の訓練は厳しくおこなったが、しかし訓練よりも重要なのは、各面接者の被面接者に対する鋭敏な感覚である」(p. 7)と述べている。これは、参与観察であると、面接調査であるとを問わず、調査全般に対する問題点の一端を鋭く突く言葉であろう。しかしここからまたもやデータの「信頼性」をめぐる問題が展開されることも事実である。

注3 (B) IX.

注4 (A) p. 3

注5 (C) X.

注6 (A) p. 4. ただし調査の手続きからいえば六項目の設定が一番最初である。

注7 (A) p. 505. なおリンドはこの二階級を「物質に関する活動に従事している人と人間に関する活動に従事している人。手で働いている人と舌で働いている人。物を作る人と物を売り、考えを生み出す人。道具を使用する人と非物質的制度を使用する人。」なども表現している(A. p. 22, note 2)。もちろんこうした「階級」分類だけでは不十分なことはリンド自身も認め、よりきめ細かな分類によって「錯綜した諸集団の多様性を微細な点にわたって解明する必要があるだろう」(A. p. 23)としているが、しかし研究の目的から考えて、主要なこの二階級だけに焦点を合せても「それは、文化の概括的特徴、市内部における主要な分岐点、生活活動の主要な分野をよく示すものと確信している」と述べらる (A. p. 505)。

注8 (A) pp. 5~6.

注9 (A) pp. 73~83.

四

つぎに問題とされるのは、参与観察における客観性の問題であるが、参与観察に限らずおよそ社会調査における客観性の問題ほど困難な論点を多く内包している問題はない。統計的方法と事例的方法とに関するいくつかの論争も基本的にはすべてこの問題をめぐっての論争であったし、さらにそれは、科学のもっとも基本的な認識論の領域にまで掘り下げて論じられなければならない性質の問題でもある。それはとうていこの小論のないうるところではない。ただここでは、リンド自身がこの問題をどのように考えていたかを辿るにとどめる。

先述のごとくリンドは、ミドルタウン研究をはじめにあって、自己の所属する文化を完全に対象化し、客観化して観察することのむづかしさを訴えている。しかもこのばあい問題は、単に研究対象の性質からくる困難さだけではなく、参与観察を中心とした事例的方法という研究方法ないし手続き自体に内在する困難性からも由来する。かれ

らが採用した文化人類学的研究法に関しては、「最大限の客観性といくつかの組織的な手続き」を特徴とするだけでなく説明がなく、客観性についての論述は特に明確な形では示されていない。リンドもこの点については「われわれが『未開人』を見るばあいの、あの客観性と眼差しを正しくもつことにまさるものはない<sup>(注1)</sup>」と、アナロジカルない方しかしていない。

一般に社会調査における客観性は、「妥当性」と「信頼性」という形で問題にされることが多い。今ここでこれらの概念の吟味をおこなう必要はないであろうが、このばあい前者は理論的枠組の正当性の問題に関連し、後者は観察者の「主観」の問題に関連することは認められてよいだろう。

事例的方法においては対象の全体関連的把握を目指すとはいうものの、あらゆるデータの無差別的集収はありえず、やはり一定の理論的枠組にしたがい、どのような視座から、どのような形でデータを集収するかが問題となる。これは事例的方法だけの問題ではなく、社会調査全般に通ずる問題であるが、この視座の設定自体の中に、社会調査における客観性保証の一つのメルクマールが存在すると考えられる。それは、いわゆる手続き的な「客観性」の問題というよりは、むしろ調査全体を通ずる理論的枠組の正当性の問題であろう。この点に関してミドルタウン研究においては、先述のごとく六種の行動系列、対比年次、「階級」などの視座が設定されており、各々が重要な役割を果し、それなりの成果を収めている。それはまた二つの報告書自体が全体として見事な形で示しているところでもある。もちろんこの調査研究の目的から考えて、より正当な、より適切な、したがってまたそれだけより客観的な視座の設定が可能であった、という批判はありうるであろう。またここで採用されている「階級」の概念についても、その当否や過不足をめぐっていくつかの批判は可能である。だがそれらについてはむしろ報告書の内容の検討という形でおこな

われるべき批判であり、ここではひとまず措くことにしよう。ただ調査法という論点からいえば、これらの理論的枠組が、調査自体の進行する過程でむしろ後から形成されていったという点に問題があるように思われる。だがこれもまた先に触れたように研究目的・対象からある程度規制されたためのやむをえない結果であり、むしろ現実の調査においてはいきわめて一般的に認められる過程であると見ることもできるし、さらに報告書の成果がすべてを解決するという見方も可能であろう。

問題はそれよりも、参与観察における観察者がいかにして「主観」を排した形での客観的観察を可能としようか、ということである。この点に関してはリンドも最初は、「調査というものについて、データの多少の主観的選択は不可避免的なものだと理解してくれるようなことはまずありえない」と語っており、特に参与観察などのばあいの「主観」に関する問題には苦慮しているようである。そして「いかなる制度もそれ自体のために研究されるものではなく、それが奉仕している生活活動と関連づけて研究されるということが、一般的にデータ選択の基準である<sup>(注2)</sup>」としているが、これだけではいささか客観性の認識について説得性に欠けるといわざるをえない。

しかしこの問題に関してリンドは、十年後の調査報告ではかなり明確な態度を示すにいたっている。第一の著書に對して、「冷い」「皮肉だ」「ミドルタウンの心を描いていない」「真実ではあるが冷く、ミドルタウンの息吹きを欠いた事実の寄せ集め」などというミドルタウンの住民自身からの批判を受けたリンドは、あらためて第二の著書の序文において調査者と現地住民との見地 (outlook) ないし観点 (point of view) という問題に触れ、自分の生い立ちにまで言及しながら、両者の間の物の見方、感じ方における差異を通して、客観性についての考察を加えている。たとえばかれは調査者と現地住民の観点の相違を認め、それが生ずる理由をつぎのように述べる。「なぜなら調査者

は、ミドルタウンを防衛すべき何らの情緒的強制をもたないからである。かれの生活はその町で恒常的に営まれるわけではなく、かれの未来はその町の未来でなく、かれの望みはその町の望みである必要はない。外部からの観察者に対して、観察される人びとが浴びせる「浅薄」とか「不公正」とかいう批判の多くは、自分の郷土の立派さを強調しようとする情緒的欲求の相違にもとづく。<sup>(注3)</sup>ここでリンドが述べていることは、観察者自身が自己の内部に積極的に確立すべき客観的態度というよりは、周囲の被観察者によって曇らされない「冷い眼差し」の必要性であろう。第一の著書に対して「冷い」「皮肉だ」などの批判を受けたかれは、そうした批判自体を自己の研究の客観性のためと考えており、方法論における「客観性とシニズム」を等値的にとらえているような形跡さえある。参与観察におけるシニカルな態度などは、皮相的ないわゆる技術としてのラポールの問題からいっても否定されるべきであろうが、結果としてかかるばあいもありうること、そして独特の地域感情によって客観的な観察が不可能とならないように注意すること、という警告は当然首肯できよう。ところでリンドは、さらにこうした現地側の問題によって陥りやすい二つの傾向について注意を促している。第一は、地域社会自体が自己の地域社会をどのように見ているかという問題に関連するのであるが、たとえば商工会議所発行のパンフレットのように、極端な地域誇示性や過度の楽天主義のためにおかす間違いである。第二は、人間性や文化過程に関する従来の理論から導き出した仮説にもとづいて、何らかの象徴が当該地域でも「象徴」としてみなされているか、また合理性がその地域でも「合理性」としてみなされているか、などの調査によって地域社会の状況を分析しようとするばあい、現地の被調査者が、調査者の意図を先取りしたようないわゆるシニカルな態度や教科書的な回答を示すために、地域社会の真の姿を把握できないことである。<sup>(注4)</sup>

この問題についてはランツも「炭坑町」調査におけるインタビューをもとにして現地居住者の類型化をおこなない、

資料源としての面接調査が十分注意しておこなわれる必要があることを述べている。その類型は、①知的に誠実で洞察力のある人、②知的に誠実であるが洞察力のない人、③知的には不誠実だが洞察力のある人、である。第一のタイプは、聞かれた質問に対していい抜けや逃げ口上をいわず、見た通りに物事を報告する人で、その観察はかなり注意深く、地域の動向にも鋭敏である。第二のタイプは、質問を逃げようとはしないが、かれらをとりにくく地域生活に対する敏感さや注意深さはない。第三のタイプは、地域生活に関する重要な事実を敏感にとらえているが、それを歪めたり、否定したり、時には隠したりすることもできる。このタイプの回答には特徴があり、たとえば「あなたがもう聞いてしまったようなことを話すわけにはいきませんよ」<sup>(注5)</sup>、「ここはよそと違いますよ」、「よそと同じ程度ですよ」などの非拘束的な回答ですませようとする傾向がある。

いずれにしてもこうした問題に当面したばあいこそ参与観察が特別の意味をもってくるわけであり、その点についてはリンドもランツも非常な努力の上、見事な成果を収めたことは事実である。<sup>(注6)</sup>しかし両者とも、その地域生活への参与が完全であったにもかかわらず、逆に研究者としてもっとも留意していた問題は、観察者と現地住民との間の「距離」の確保であった。リンドは「地域感情に感染しないこと」の重要性を説き、ランツもまた「われわれは間もなく、真のラポールに必要なものは、地域生活の価値やパターンに衷心からはいり込むことではなくて、集団の価値に一致すべきときと一致してはいけないときとを心得た部分的参与であるということを知るにいたった」<sup>(注7)</sup>と述べている。ここでの参与観察は、地域生活への「参与」ではあっても、地域の人びとと全く同一の眼によって社会事象を把握しようとする「観察」であってはならない。それは、地域の人びとによる社会事象把握の仕方自体もまた観察の対象でありうる、という一事をとっただけでも理解されるところであるから。こうしてわれわれは、観察者と現地住民

との間の「距離」を積極的に認識すること自体のうちに、参与観察における客観性確保のもう一つの支柱を見出すことができる。

しかし参与観察における客観性の問題が、このような調査者と現地住民との間の単なる「距離」の問題として処理されてしまつてよいであろうか。少なくともそれだけならば、全く「よそ者」としての観察者が、単なる「技術」としてのラポールの洗練化をはかるだけで、簡単に参与観察は可能となつてしまふだろう。この点に関してリンドはさらに考察を進めている。

すなわちかれは、「社会現象の“科学的”な記述というものは、観察者の過去の経験にもとづいて養われた洞察力を通じて必然的に選択されたものである」とし、さらにこの記述に「分析」が加えられるときには、選択の要因および記述分析者の「価値」がきわめて重要性を帯びてくる、と説く。そして「いかなる社会学者といえども、問題の“選択”において“価値”なしにおこなうものはいない。いわゆる“ご立派な”科学者は、かれの価値を明らかにするよりは、かれの仮説をテストすることを望むが。かれがなすべきことは、研究したり問題を選択したりするかれの価値を、自分自身の内部で確固たるものにし、それをできるだけ現実に近づけ、また自分の判断で調査に不適当な諸価値を抑制し、さらにかれの価値が一般に考えられているものと隔っているばあいには、かれの観点を明らかにすることなのである」と、<sup>(注8)</sup>「価値」を内包した「観点」をむしろ明確に打ち出すことを主張している。ここで「価値」の内容をせんさくすることは特に必要ではなからう。だが問題を選択し研究を進める基礎として存在している「価値」と、それに立脚して周囲の事象に対し一定の判断を下しうる「観点」は、けして単なる生活歴の相違や、それにもとづく生活・文化パターンの相違などによつてもたらされたいわゆる社会的「距離」の問題に解消される性質のもので

はない。またその観点はけっして偏見のたぐいでもない。偏見は修正すべきであろうが、こうした観点は確立されなければなるまい。そしてさらにリンドが述べるごとく、科学はむしろ「観点」に依拠するところがきわめて大であるとさえいえる。「観点なしの調査は不可能である。もし調査が単なる写真であるならば、科学は静止し、弁別力のない、方向性のない、些末事項の集積に墮するであろう。科学は、現実によって方向づけられた鋭く確固たる観点に依拠しているのである。<sup>(注9)</sup>」このような観点は、むしろ調査以前の問題であるかもしれない。しかしそれはまた同時に、何のために、何を調査し、いかに分析するかという調査全体を貫くもっとも重要な基本線でもあり、いわゆる調査者の「立場」そのものでもある。この「観点」ないし「立場」は単なる「主観」の問題ではなく、歴史の進展、社会の進化発展の道程の中に客観的法則の顕現することを認識し、その方向に沿い、その法則と関連させて現時点における社会事象を説明しようとする調査者の基本的態度である。いうまでもなく社会の発展法則をめぐっての立場・観点の相違はありうるであろう。しかしいづれにしてもこうした「観点」ないし「立場」に明確に立ち、偏見を排し、対象をあるがままに見究めるところに「客観性」もまた生ずると考えられる。統制観察においては観察者自身は一個の観察用具となりきり、できるだけ観察対象との交渉を断ち切ることが要求され、そこにまたこの方法独自の「客観性」が保証される一つの根拠が存在する。しかし観察者自身が自己を観察対象の生活過程に投入することを前提とした参与観察においては、統制観察におけるような「客観性」は最初から問題にならない。そこではいわば全く文脈の異なる「客観性」の確立において研究の客観性が確保されなければならない。そしてリンドによるその回答が、「観点」の明確化による「距離」の認識であったのである。このように考えてくればいわゆるラポールの問題も、社会調査における緊張緩和術とか人間関係の技術とかに矮小化される性質のものではなく、むしろ調査者の「観点」ないし「立

場」を明確にすることによって新たに形成される「人間的連帯」の問題として理解されなければならないであろう。リンドの方法論の基底にあって、かれの研究の成果をあらゆる意味で支えたのは、このような内容をもつ「観点」なのであった。もちろんリンドの「観点」が、先述のごとく、観察者と被観察者との間に生じた「情緒的欲求の相違」にもとづくもの、という見方も可能であろう。そしてさらにまた、「観点」の内容こそ厳密な意味で吟味され、検討されなければならない、という意見も当然起りうるであろう。だがそれに答えるのは、畢竟ここでもまた二つの報告書自体でなければなるまい。そして私は、この地域における「X家」の位置づけをはじめ、一九三六年におけるランドンとルーズベルトの大統領選挙戦の分析から、さらにその後の展望などを含め、もっとも極端な意味では「ファシズムとコミュニズムの二つの道」の選択を迫られているミドルタウンをきわめて憂い深く観察しているリンドの「観点」に、些かの色眼鏡をもって見ながらもなお多くの共感を覚え、それが単なる「情緒的欲求の相違」からもたらされたものだけとは考えられないのである。

あるいは私は多少リンドを勝手に解釈し過ぎたかもしれない。しかし後にかれが、“Knowledge for what?” (1939) において、社会調査は単に学者的好奇心の満足や、知識それ自体のためにおこなわれるのではなく、人びとの「基本的要求」に対してかかわりをもたなければならぬ、と説くにいたったことを考えるならば、ある程度の行き過ぎも許されるのではなからうか。

注1 (A) p. 5

注2 (A) p. 505

注3 (B) XIV

注4 (B) XIV

注5 (C) pp. 284~286

注6 たとえばランツは、スタッフが地域生活への参与過程で苦勞した問題として、つぎのようなことをあげている。ジョークのいい合いという地域の人びとの間に存在する相互作用のパターンに馴れ親しまなければならなかったこと。そのジョークには、屢々破壊的でサディスティックな調子ものがあり、最初のうちは、簡単にラポールが失われることも度々であった。また地域の人びとの自己卑下にも悩まされ、強いて近づこうとする努力も、かえって非人間的なものとして拒否されるほどだった。また調査の初期には、調査の動機・目的などに対する理解がなかなかえられず、疑惑と敵意にみちたさまざまな噂をたてられた、等々(C. pp. 8~11)。

注7 (C) p. 10

注8 (B) XV

注9 (B) XVII